

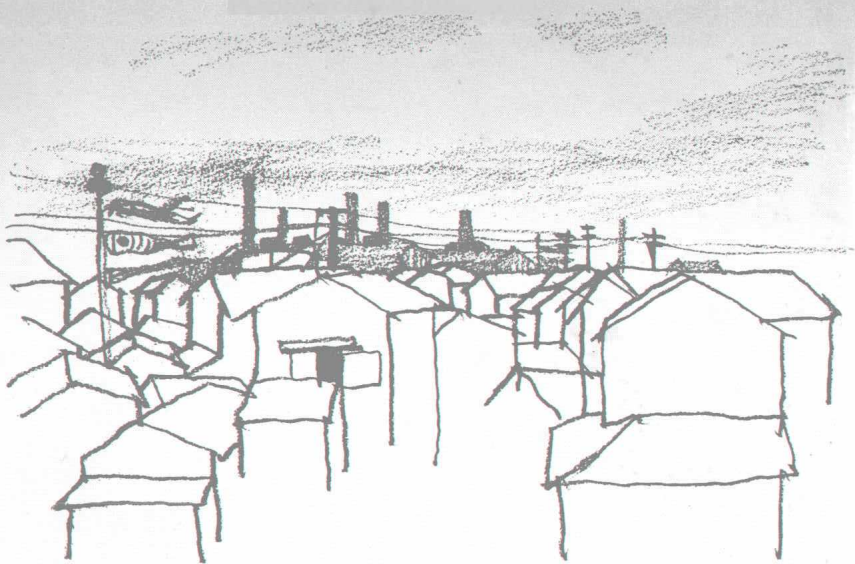
早乙女勝元 長編青春小説集 1



下町の故郷

下町の故郷

1





長編青春小説集 (1)

下町の故郷

© 1975年 4月 第7刷

作 者 早 乙 女 勝 元

発行者 小 宮 山 量 平

東京都新宿区若松町104

発行所 株式会社 理 論 社

電話東京(203) 5791=代表

振替口座東京 9 5 7 3 6

0393-90701-8924

1968年初版発行

わが母にささぐ



はじめに

物情騒然。世の中のありさまが、日々こんなにはげしく移り変つては、だれだって不安になります。自分たちの明日がどうなるのか、職場が、社会が、いつどんなふうに変動するのか、先のことはとんとわかりません。

まさかというとき、そのとき、たよりになるのはオカネ。そう信じこむ若者がふえてきました。あしたはあしたの風がふく、とさびしそうにつぶやく若者もすくなくありません。

みんな、自分のカラをあつくしはじめてきているのです。

なるほど、社会をふく風がつめたければつめたいほど、カラがあつくなるのはしかたのないことかもしれません。そうして、みんなが自分のカラの中にとじこもってしまったら大変です。サザエのつばやきのたとえ話だってあるじゃないですか。いつ、小さなカラごと、黒い波にさらわれなくてもかぎりません。

まさかというとき、そのとき、たよりになるのは、やっぱり人間なのだ、とぼくは思います。

サザエ同士が、数珠つなぎに、しっかりと腕をくまなくちゃだめなのです。それには、どうしたらいいか……と考えて、ようやくのこと、一つだけ思いつきました。

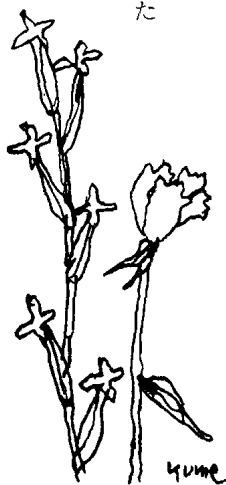
まず、自分が思いきって裸になること。心のおくをきりひらいて、悩みや不安、怒りや喜びを、そっくり相手につたえることです。そこから、親身な友だちができるのではないでしょうか。この心の友を一人ふやし二人ふやし、そうして声を声につなげ、心と心とをむすんでいったら、切ってもきれない人間関係が生れるでしょう。これがいわゆる「仲間」というものなのです。

少年の日、非常に孤独だったぼくは、そういう仲間がほしいと痛切に思いつづけ、勇気をもって、自分のなにもかもうっさいをさらけだしてみました。絶対に口外しなかった自分の恥まで、胸のかさぶたをひきはがす思いで書きつらねました。

それが、この「下町の故郷」なのです。

ぼくの生いたちの記です。

そのとき、ぼくは十八歳。十八歳の全力を投球したこの処女作は、あるいみで、ぼくの人間変革の記録といつていいかもしれません。

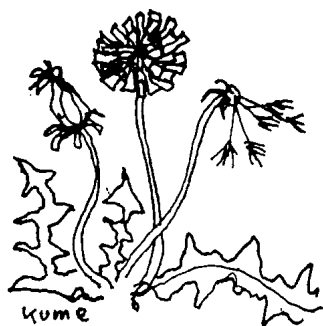


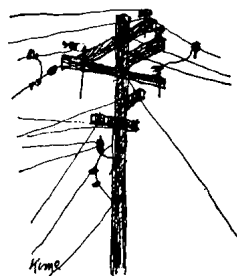
そうてい・カット
久米 宏 一

第

一

部





1

私には、ふるさとはない。

もし、ふるさとというものが、ただたんに、その人の生れた場所だけであるとするなら、私のふるさとは、東京の片隅——足立区柳原町で、ウジ虫のようにたくさんの人がうごめいているはきだめのような町だ。

この町のまんなかに、ピサの斜塔のようにかたむいた校舎の柳原小学校がある。

いぶしたようにまっくろけの古い建物だけど夕方になれば、ガキ大将のモッチャんの家の二階から、この学校のこわれたガラス窓の一枚一枚が、夕陽にかがやいて、オレンジ色にチカリと光るのがはつきりと見える。モッチャんの家は肉屋だ。このすぐうしろに「東照宮」がある。おなじ東照宮でも、日本一ちいさな東照宮で、ここにはコジキの夫婦がすみこんでいる。

この東照宮の横のドロコ道をまがって、荒川土手のほうへゆくと、堤防につきあたるところに三本のひよろながい松の木があつて、この下にミッキ屋という小さな駄菓子屋がある。ミッキ屋から左にかぞえて五軒目の長屋が、六畳と四畳半二間の、私の家である。

昭和十四年。八つの年まで、私はこの生れ故郷に住んだ。

勝元という武将のような名前の私は、その名とは逆に非常に柔弱な子どもだったという。教室のなかで、一日中、自分の席のとなりに母がいなければ承知せず、ちょっとしたでも母の姿が見えないと、わんわん泣いて教室からとびだし、ハダシのまんま家にかえって、

「こんなに大きくなって、おまえはまだ、母ちゃんの世話をかけんのかよ……」

と、母からピシリピシリ尻をたたかれた。

学校がおわると、ちいさな鼻たらし小僧どもは、みんな、わッと歓声をあげて、鉄砲玉のように川のふちへとんでゆくが、私は一人、校舎の裏口からそとで家にかえると、かならず四畳半の部屋の押し入れのなかにもぐりこんで、目をとじた。押し入れの戸をピツタリとしめれば、真夜中みたいに暗いけれど、外では陽がさんさんとかがやいて、まるでマツチ箱をならべたような下町の屋根の上に、午後の陽ざしがまっかに焼きついている。

そのおなじ太陽の下で、私の兄は荒川放水路の土手にのぼり、スモウをとってころげまわるかと思えば、またあるときには、川の中州までシジミや、蟹や、小魚をとりに泳いでゆく。彼はクロンボみたいに歯だけ白くして勇ましくかえってくるが、私はたまに外に出ることがあっても、一人だけはなれてポツンと土手の上にたち、ただだまって、それを見ているだけのことである。

「ジジイかづ」

肉屋のモツちゃんが、私にそんなあだ名をつけてくれた。

「おまえおジイさんだ。二、三日すると腰がまがって、シラガがはえてくるから。そしたらね、すぐお墓んなかにもぐるんだぜ。お墓んなか、シンヤリとつめたくてな、地獄のエンマさんが、ペロ

ぬきにやってくんだぞ」

それからというものの、私は近所の人からも友人からも、「ジジイ小僧」とよばれるようになった。そしてこのジジイ小僧は、よく押し入れのなかから、両足をもって母にひきずりだされた。

「——カヅは、すこしは子どもらしくせんかい。昼間っから、でれでれと寝てるようなやつには、神様が怒って、背中に青カビをうえつけるよ！」

母がそうになると、私はビッコの下駄をつっかけて、しょんぼりと、しかたなしに外へゆく。でも、どこにだって、私を相手にしてくれるものなんかいやしない。

私は堤防にそって、泣きたいような気もちにおそわれながら、自分のつま先だけを見つめて、一歩一歩と常磐線（じょうはんせん）の鉄橋のほうまで歩いてゆく。鉄橋に出ると、女の子みたいに水ぎわに咲いている草花をいじくり、その花びらを一枚ずつちぎって、水のおもてに流してやる。すると、荒川放水路は私の目の下でさらさらと流れ、その自然のリズムに軽くおどって、花びらはたちまち川下のほうへ見えなくなってしまう。

ここから目をあげると、あたたかな陽ざしがいっぱいにふりそそいで、むこう岸には、小菅の刑務所がキラキラとかがやいているのだった。まるで、童話で読んだシンドバッドの夢のお城のよう
に。――

「あのお城には、だれがいるの？」

いつか私は、姉のさよにたずねた。

ちいさなさは、土手の上になって、ふさふさとした髪をそッと右手でかきあげながら、

「あのネ、悪い人よ。お姫さまや王子さまじゃなくて、悪いことをしたたくさんの人が、あのなかにとじこめられているのよ」

「でも、いいなあ。あたいたち、一回でもいいからさ、ああいうお城みたいな家へいつてみたいなあ……」

「ばか！」

さよは口をとがらせて、すこしこわい顔でそういった。

だれもない鉄橋の下で、かたつむりのようにうずくまると、私は一時間でも二時間でも、むこう岸の銀のお城と、それがそのまま、さかさまにうつっている水の上をながめる。

水は、いつまでたってもとまらない。流れてる。流れている。その水の流れをじっと見つめているうち、いつのまにか、あたりはひっそりとうすぐらくなって、シンドバッドのお城の角ばった望楼にも、夕方のやわらかな光がほんのりとおちてくる。

ふいに、私はたちあがった。

遠くの土手のほうから、さよの声がきこえてくるのだ。

「カヅモト、ごはんだよォー」

その声をきくと、私ははじかれたように、鉄橋の下に柱に身をかくした。

「カヅモトォー！」

さよの声が、だんだんと、こちらに近づいてくる。

私は石の柱の横をとびのいて、こんどは、川岸の草むらのなかにころげこんだ。さよが心配して、

声を高くすればするほど、私には、なにかしら無性に悲しいものが胸のなかにこみあげてきて、頬のあたりに妙にあついものがおちるのをぬぐいもせず、草むらから草むらへ、かげから、またつぎのかげへとかくれてゆくのである。

とうとう、さよがたずねあぐみ、鉄橋の上にのぼって、右をむき左をむいて、かすれた声で私をよんだけれど、その下にうずくまった私は、やっぱり動かなかった。さよのその声をきくと、私はなぜか自分がひどくさみしくなつて、この世のなかのだれから見すてられている「捨子」のようなものと思われ、それがまた、かほそい胸をキリキリとしめつけるのだった。

私には、母だけしかいなかった。

ほんとうは、「父ちゃん」もいるのだけど、その父は長いこと家にかえつてこなくて、私は自分には父ちゃんなんて、生れる前からないものだとはかり信じていた。……でも、さよがときどき、思いだしたように、父のことをしゃべるのを耳にすると、

「あたいのトオちゃん、いるの？」

と、ビックリしてきいた。

「あたいのトオちゃんたら、どこいつてるの？　どんな人なの？……それで、どしちゃったの？」
やつぎばやにそうたずねると、さよはだまり、母はまゆをひそめて、

「遠いところへいつてるんだよ」

「どうして？」

「お金もうけに」

針仕事の手を休めずに、母はぼつんとそういった。

すると私は、「もうかるの？」と、かならずたずねたけれど、妙にこわばった表情になった母は、「どうだかね」

と、あいまいに言葉をにごして、だまってしまう。

私は、それ以上きこうとはしない。たとえそんな父っちゃんがいいたところで、どうせあたいになんか、なにも買ってきてくれるもんか。家にいないような父っちゃんじゃ、だれんどこだってかあいがってくれるはずがない、と、幼な心にそう思ったのである。

いつも夕方になると、近所の子どもたちは、東武線の堀切駅まで、手をつなぎ歌をうたって父のかえりをむかえにいった。

私も、その子どもたちのあとにしたがい、駅までついていって、だれをまつでもなく、線路のむこうばかりを目が痛くなるほど見つめていたものだった。

京成線と交差するちいさなトンネルをくぐって、ゴォーッと茶色い電車がやってくると、そこには、となりのヨシ坊の父さんも、ター坊のおじさんものっている。みんなべんとう箱をこわきにかえて油っこい作業服のなから、白い歯をのぞかせ、

「や、よくむかえにきたな。よしよし、そいじゃ、かえりに金太郎アメを買ってやるぞ」

などといい、満面に微笑をたたえて電車からおりてくる。

私は、とたんにくると横をむいてしまう。たまらなく悲しくって、黒い土の上に、大きな涙が

音もなくおちるのを見つめながら。……

いくらまっても、だれもくるはずがないのだった。それでもだれかが、「カヅモト、まっていたんか」といって、おりてきそうな気がしたまらない。一時間でも二時間でも、私はそんな錯覚にとられながら、土手の上にペタンと腰かけて、またそのつぎの電車のくるのをまっている。が、何台電車がやってきても、やっぱり、私に関係ある人はだれもおりてこない。

私はひろひろとたって、こんどはつめたい二本のレールを穴のあくほど見つめながら、レールぞいに、トンネルのきわまで歩いていった。

ここから、フェーッと鋭い警笛を鳴らして、三台連結の「浅草行」がとびだしてくるのだった。私はおそるおそるトンネルのふちにすがって、なかをのぞいてみた。まっくらで、なんにも見えない。

「オーイッ！」

と、こんどはすこし元気になって、私はトンネルの暗闇にむかってどなった。

それでも、まだ電車はやってこない。私はとうとう腹ばいになって、つめたいレールに耳をおしつけ、遠いかすかな電車の音に、耳をかたむける。すると（や、音がする！）ピッキンピッキンとちいさな音が、やがてしだいに大きくなってくると、私は喜びに身体中がふくれあがった。

とつぜん、いいことを思いついた。私は脱兎のように土手の上にかかあがると、小石をひろって、すばやくレールの上にならべた。ふたたび土手の上にひきかえしてまっていると、こんどは、ほんとうに電車がやってきたのだ。フェーッという警笛が鳴って、ガターンガターンと、ほんものの電

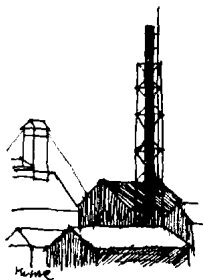
車がついにやってきたのだ。

私は、車輪の下になる石を見つめていた。

と、急にその胸がさわぎだした。しめつけられるように苦しくなつて、わっとさけんで両手で頭をかかえ、とっさに、電車がひっくりかえるのではないかと思つた。

すると、じつとしていられた。歯がガチガチ鳴つて、気が狂つたように土手の上をころげまわつて泣いた。シューッと音がして、はッと気がついて顔をあげると、電車はすでに暗い駅のなかにすべりこんでおり、レールの上の石はあとかたもなかった。

私は、ほっと胸をなでおろすと、でも興奮がさめやらず、シクシク泣きながら、まるで悪いことをして、だれかに追われてでもいるように、かけて家にかへつた。



2

ジリジリとてりつける夏の日がすぎて、やがて空が高く澄み、赤トンボがむれとび、対岸の土手がとりわけ美しく見えるころ、私の兄は、昼間の

中学から夜学に転校した。

兄がはたらかなければ、家がやってゆけなくなつたのだ。柳原の町から、学校のある向島^{むこうじま}の町まで、歩いてゆけば一時間半もかかる放水路ぞいの道を、兄は毎朝毎晩、「テクシー」でかよつた。

夜も十時を過ぎて、あたりはひっそりと寝静まり、床下にこおろぎの鳴く声がシーンシーンときこえるころになると、「砂漠にイ陽がおちてエー夜となる頃オ……」と、兄のうたう「アラビアの歌」のひくい声が、遠く土手のほうから近づいてきて、そして、重い玄関の戸がガラッとあく。

「母ちゃん、ただいま！」

元氣よく、兄がかえってくるのだ。

いつも、そのころになると、母は針仕事をやめて台所にゆき、兄の夕食の用意に、戸だなやまな板をガタガタさせる。ちいさなタルからは、「おもし」をどけてぬかみそを出し、火鉢にはあたらしい炭をたっぷりついで、あたたかいお湯をわかすのだった。

それから、母の内職と兄の勉強は明方までつづいた。

夜なか、私が何気なく目をさますと、ぼんやりと電氣がとまり、その下に母の姿が暗くうつしだされる。母がセッセとうごかす指先の針と、鼻水が、電氣の光を反射してチカリと私の脳裏にきざみこまれると、ほかの夢はみんな忘れてしまっても、それだけは水晶のかけらのように、いつまでも、頭にやきついてしまつてはなれなかった。

私は、四人兄弟の末っ子だった。兄と、姉が二人。そのうち長女の静子は、向島でお菓子屋をやっているばあさまの家に、ひきとられていつてしまった。それも、ついこのあいだのことである。

「静子はいいい子だ。この子のほかはいらないよ」

そういってばあさまは、部屋の隅で泣きじゃくっていた静子の腕をとると、むりやりに、向島の町へつれていつてしまった。その日は、夜がきて、母は目のふちを赤くそめて、いつまでもねむ